

このお便りは私が担当している太極拳教室のみなさんに毎月お届けいたします。

健康妄語録 **なぜ「尊厳死」を選ぶのか**

前月に続いて「尊厳死」について書きます。「生きられる限り生きる努力をする。」「医療関係者も治療、延命に最善を尽くす。」ということはもちろん原点です。ですから、死をまねく積極的な処置（薬物とか注射とか）を行ういわゆる「安楽死」については肯定するものではありません。

しかし、回復の見込みがまったくない癌の末期状態や植物人間状態におちいってもなお、ありとあらゆる生命維持装置に頼ってただただ延命させられている自分を想像するとなんともやり切れません。（とくに人工呼吸器はいったん装着すると、外せば死に直結するので「殺人罪」を問われるとして医師もはずすことに手を下せない、患者の家族も医師にそれを頼めないということになるのです。また付けられた患者にとってはその肉体的な苦痛もさることながら、その瞬間から話すことが不可能となり、そのまま臨終を迎えなければならないことも大きな問題と聞いています。）

したがって、医師、医療施設の法的リスクを救済し、また家族の精神的、肉体的、経済的負担を軽減し、そして死にゆく当人が尊厳を維持しながら死ぬ、という方法が「尊厳死」なのです。

私がつねに携行している「尊厳死の宣言書（リビングウイル）」には次のように明記されています。

私の傷病が、現在の医学では不治の状態であり、すでに死期が迫っていると診断された場合には徒に死期を引き延ばすための延命措置は一切お断りします。

但しこの場合、私の苦痛を和らげる処置（注；モルヒネなど）は最大限に利用してください。

そのため、たとえば麻薬などの副作用で死ぬ時期が早まったとしても、一向にかまいません。

私が数ヶ月以上に涉って、いわゆる植物状態に陥った時は、一切の生命維持措置をとりやめて下さい。

この宣言書は日本尊厳死協会（TEL03-3818-6563）の会員になることによって発行されます。これを提示すれば、現在ではおおかたの医師、医療機関は尊重してくれるということです。

もちろん、「尊厳があろうとなかろうと天命のままに生きなければならない」あるいは「医療行為は最後の最後まで尽くすべきだ」という意見も一方では有力です。人間の死生観については、民族により、宗教により、また時代により、じつにさまざまな見解がありますが、私の場合はあくまで私の生涯の伴侶であり、ともに同じような事態に遭遇する可能性を五分五分に持っている、妻との合意により、同じ決断をしたわけです。皆さんのご参考になればとご披露しました。

用語解説 さんせんそうしょう **三尖相照**

健康太極拳基本5ヶ条のひとつです。「**上肢、下肢、頭部の向かう先を揃える**」とされています。たとえば、「蹬脚」で蹴り出したときや「下勢独立」や「海底針」で立ち上がったときなどに求められる姿勢です。もちろん頭部は体躯の中央にあり上肢、下肢は左右に付いているのですから、これを一直線上に揃えようと無理な、窮屈な姿勢にする必要はありません。あくまでも“向かう先”を揃えるということです。言葉を変えれば『(想像上の) 相手をまっすぐ見ながら、脚や手はその体躯に当たっている』状態ということです。

旅をうたい拳を詠む

1月初旬に2泊3日のツアーで南九州へ行ってきました。熊本空港からバスで人吉へ。そこからレトロな観光列車に乗り、ふたたびバスで霧島神宮に参拝、霧島温泉郷のひとつで、源泉が何本も勢い良く吹き上がっている丸尾温泉に一泊。翌日はバスで青島、鶴戸神宮、^{おび}飫肥、桜島をめぐる指宿温泉が二泊目。次の日は長崎鼻、菜の花が満開の池田湖、開聞岳の麓を通るJR指宿枕崎線にちょっと乗車し、次いで知覧では「特攻平和会館」を見学、鹿児島市で桜島を正面に見る仙巖園を散策し、鹿児島空港から東京に戻るという盛りだくさんのツアーでしたが、天候にも恵まれ大いに楽しんで来ました。その旅の歌をいくつかご紹介いたします。

スイッチバックとループで登る肥薩線 明治の気概今に伝えて (明治42年開通です)

神々の吐息か白く高々と吹きては滾る丸尾の源泉 (高千穂峰も程近い山懐の温泉郷です)

^{はる}初春の陽をさんさんと浴び菜の花も開聞岳もすくと立ちをり

茶畑ものどかにうねる平成の知覧に重い歴史が重なる

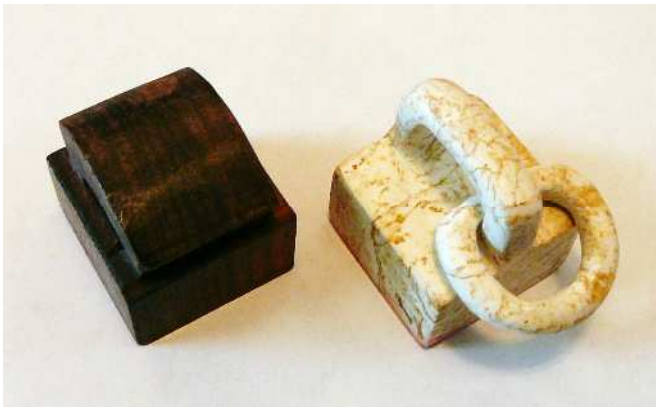
笑み浮かべ飛び立ちゆきし若きらのその遺書に見る心の揺らめき

遊印遊語

宋時代の易学の大家であり、大詩人であった邵康節の「清夜之吟」の前半の2句を白文と朱文に彫り分けたものです。

この詩の全文は“月天心に到る^{ところ}處 風水面に来る時 一般の清意味 料り得たる人 知る

少なし”というものです。後半は大変難解ですが『このような素晴らしい情景の秘める深遠な意味を理解している人は少ない』と私なりに解釈しています。秋の夜のきれいな情景も、ごく当たり前と見ればそれまでですが、そこに大宇宙の摩訶不思議な摂理をこの詩人は感じたのでしょう。



横道にそれますが、北九州にはこの詩から命名した「天心」という旨い地酒がありますが、包装紙には書家の榊莫山先生の洒脱な筆で「月到天心處」と書かれている優れたものです。

ところで、良く印材の種類などを聞かれますので、この二つの印を写真でご紹介しますと、左側の印は紫檀材、右側の印は寿山石という印材です。

篆刻には石の印材を使うことが多いのですが、

ときには木や竹も使います。頭部の飾りは鈕^{ちゆう}といってももともとは銅印や金印などのつまみや紐穴だったものが発展していろいろな形状の飾りを彫るようになったものです。この写真のものは、私が、削る、彫る、磨くなどの加工をして作ったものです。これはごく初歩的なもので、左が瓦紐、右が連環紐(削りだして環を繋げた形に整形したもの)と言います。本場の中国では動物や風物などを頭部だけではなく印材全体にまで微細に彫り込んだりして「彫紐芸術」という分野を為しているものです。さしずめ日本でいえば「根付」のようなものですが、石印材は種類も多く、形状、色彩、模様など実に多彩で、これと彫刻との組み合わせの妙には素晴らしいものがあります。